

情報技術の匠

PROFESSIONAL

第30回
ビジネス・プロセス・モデリングの匠

情報の異種結合

IBCS(IBM Business Consulting Services)のビジネスコンサルタントにして、研究畑出身の工学博士。IBM ディスティングイッシュトエンジニアでもある。

「よく経歴を珍しがられますが、わたしとしてはそんなにびっくりされる転身をしてきたとは思っていません」

IBCSでコンサルタントして活躍する福永は、TRL(Tokyo Research Laboratory : 東京基礎研究所)の前身であるJSI(Japan Science Institute)が、アジア初のIBM基礎研究所として1982年に設立された翌年、あるシンクタンクから研究者として日本アイ・ビー・エム株式会社(以下、日本IBM)に転職してきた。

IBCSには、博士号を持つコンサルタントは多少いるし、TRLからの移籍組も何人かはいらる。しかしながらIT(Information Technology : 情報技術)系ではなくビジネス系を担当している福永は、確かに異色の存在だろう。

しかし彼はそう思わない。「シンクタンクから基礎研究所に移ったときの方が思い切った転身で、今はどちらかという昔に戻ったという感じです。それに、極端な話なのですけど、ビジネスプロセスもソフトウェアと一緒にあります。プログラムと同じで、かなりの部分まできち

と書けるし、実装もできると思っています。それも理屈の上だけではなく、わたし自身のコンピューターサイエンスとビジネスの両分野における経験から実証できると思っています。きちっと書けるということは、オンデマンドビジネスでは特に重要です。というのは、オンデマンドビジネスのビジネスプロセスは固定的なものではなく、環境に応じて変更できる能力そのものが競争力になり、それを支えるためにプロセスとITを迅速に構築し、かつ変更するための技術が必要になってくるからです」

しかも彼はそれを単に論じるだけではなく、実証しようとしている。彼が経験したサプライ・チェーン・マネジメントのプロセスリエンジニアリングの事例を基に、コンサルタント自身がプロセスやITの仕様の主要部分を書き切ってしまうための技術研究を、TEC-J(Technical Experts Council of Japan)という日本IBMの技術者の自主的なコミュニティー活動の一環として、大和のソフトウェア研究所やTRLの若手エンジニアとチームを編成して実際に行っているのである。

「この活動にはかなり力を入れています。私の少し変わった経歴を、普通であれば成り立たないようなチー



福永 光一(ふくなが こういち)
アイ・ビー・エム ビジネスコンサルティング
サービス株式会社
インダストリアル事業本部
パートナー(理事)
IBM ディスティングイッシュトエンジニア
工学博士

[プロフィール]
1983年、日本IBM入社。ソフトウェアエンジニアリングなどの研究に従事。東京基礎研究所コンピューター・サイエンス・インスティテュート部門長を経て、1995年以来、製造業を中心とした企業のビジネスプロセス構築に携わる。
IBMアカデミー・メンバー。九州工業大学大学院非常勤講師。

ムを作ることによって生かすことができます。同時に、ディスティングイッシュトエンジニアとして、会社に貢献できる技術を研究するとともに、IBMのこれからを担う人たちの成長にも貢献できるという「一石何鳥」にもなる、とても楽しい活動です」

「コンサルティングとは、お客様が気付いていなかった事象を探り出したり、あるいはお客様ご自身では変えられないでいる仕事のやり方の改革をお手伝いしたりという仕事です。

それには論理的な展開力が必要であり、そのために必要な資質は、研究もコンサルティングも共通です。もちろん違いもあります。研究は自然現象や数字を対象にしていればいいのに対し、コンサルティングでは人間の利害関係が大切であり、その上で人の心配事を解いていかなばなりません。何よりもそれが大切です」と、コンサルタントにとっての必要な心構えを語る。

現在、福永は、ある製造業のお客様の業務改革に取り組んでいる。コンサルティングに当たっては、IBMが取り組んできたリエンジニアリングの経験と、今まで蓄積してきたベストプラクティスをお客様にご提案できることが強みの一つになっている。それは研究者からコンサルタントに転身した、福永自身についても言えることである。

「本当に無趣味なのです」と笑う福永だが、料理に凝ったり、ロックを聴いたり、ジムでストレッチに励んだり、オフの時間は充足してい

る。中でも書店には足しげく通うという。

「ただ以前に比べると、書店に行く回数は減っていますね。

専門書やある分野の本を深く求めようとすれば、やはりオンラインショップにはかないません。扱っている書籍数が圧倒的に違いますし、オンラインショップの『購入者による書評』や『この本を買った人はこんな本も買っています』が意外に役立つのです。例えば、購入者全員が五つ星を付けた本に、まず外れはありません。これは意外性の発見で、ロックやカントリーの音楽CDもこの方法でレパートリーを増やしています。

ですから街の書店に行ったときは、オンラインショップではチェックできない本、例えば料理本のコーナーをのぞきます。これだけ実際にページを繰ってみないと良しあしを判断できませんから」

料理にのめり込むようになったきっかけも、本屋である料理の本をたまたま見つけたからだ。

「実はそれまでは、料理というものはとても複雑で、料理の数だけレシピがあるのだと信じていました。ところがその本は『方程式』で作るといった考え方でした。今思うと、コンポーネントがあって、その組み合わせなのだというその本のロジカルな部分が気に入ったというか、わたしの思考パターンにはまったのでしょう(笑)」

研究活動にしる、コンサルティングにしる、福永の取り組みにとって常に肝となるのは「情報の異種結合」だ。

「国際学会で高い評価をいただいたものを含め、今までずいぶんと論文を書きましたが、核となるアイデアは、例えば帰宅する電車の中で思い付くことが多いのです。オフィスで熟考を重ね、どうしてもなく行き詰まっていた解決策がふっと思い浮かぶのです『そうだ。昔やったあの仕事が使えないじゃないか!』まさに情報が異種結合する瞬間です。

コンサルティングは無から有を生み出すことはほとんどありませんが、発明や研究も同じで『あっちのものをこっちに持ってくる』という、一見結び付きそうものないものを結合させたときに生まれるのです。思い付いた瞬間に、例えば論文であれば、それは完成したも同然なのです。

ビジネスプロセスをプログラムのように書き表すという現在の取り組みについても、やはりビジネスの知識とコンピューターサイエンスの知識の異種結合ではないかと思っています」

福永は自分の将来について、70歳くらいまでのプランはだいたい描けているという。「今は、その先で何にチャレンジするかを考えるのが楽しみです」と笑う。

その内容については、福永は何も言わないが、これまでの経験から察するに、きっと新たな異種結合を夢見ているに違いない。